

◆ 平成30年度活動報告シート ◆

団体名：行幸湖浮きウキフェスタ実行委員会

21A-38

代表者：委員長 田中 忠

URL :

1. 活動が必要とされた状況

行幸湖（みゆきこ）は、利根川と中川を結ぶ調節池（＝平地ダム湖）で、中川の洪水抑制（夏期）と工業用水と水道水の取水（冬期）に利用されている。夏期には水位の低さ（4m）と流量の少なさから、水質が悪化しアオコが大量に発生する。また、5kmにわたる両堤防は、コンクリートブロックで護岸され、さらに夏冬の水位差が7mもあり、岸边にも水面にも植生にとぼしく、57ha（東京ドーム12個分）のダム全体が貧弱な生態系になっている。そこに水質改善機能を持つ「ビオトープ浮島」を設置して水質改善と生物多様性空間づくりを行う。



2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

「ビオトープ浮島」（以下浮島）の組立・設置：浮島は、間伐材と竹を組み合わせたイカダに、木炭とアシの根を入れた袋を積み、水面に浮かしたものだ。アシの成長と共にアシの根による水質改善作用と、茂ったアシによる「島」は、鳥や魚などの休憩場・隠れ場となり、新たな生物多様性空間を出現させる。10月28日（日）、市民団体・近隣企業・地元行政で構成される実行委員会(22団体)が水辺再生イベント「浮きウキフェスタ 30」を実施。その一環として浮島を作り、湖面に設置した。浮島づくりには、小学生以下の子供9名を含む計82名が参加、4班に分かれ4基の浮島をつくった。組み立てられた浮島は、竹のレールを使い湖面に投入(進水式)、ボートにより湖の中央に係留され固定された。



3. 活動の成果

平成21年にフェスタ開催以来、設置された浮島の数はずでに72基にもなるが、一部は寿命により壊れ、浮島としての役割を終えている。水質改善の効果は、平地ダム全表面積に対して浮島が占める面積の比率が余りにも小さいので、水質改善は無理とのこと（埼玉県環境科学国際センター見解）。生物多様性空間づくりの効果は、水鳥の集まる場所となるなど目視ができ、十分な効果が上がっている。昨年は護岸に看板を立て、ビオトープ浮島の活動を、わかりやすく説明できるようにした。

4. 今後に残された課題

ある条件下の水量では、水質改善の効果が実証されている浮島ではあるが、広大な水面をもつ行幸湖の夏期のアオコ発生に対して、この数の浮島の水質浄化作用では決定的な効果は期待できない。しかし、生物多様性空間は着実に増え、その成果を見ることができる。水環境の大切さや浮島のもつ役割など、浮島組立を通じて次世代を担う子どもたちに広く伝えることに、今後の活動も続けていきたい。